

## 題目：重い精神障害をもつ人を支援する精神科訪問看護のための 教育プログラムの作成と評価

保健医療学専攻・看護学分野・精神看護学領域

学籍番号：17S3004 氏名：天野敏江

研究指導教員：岡田佳詠 副研究指導教員：稲垣誠一

キーワード：精神科訪問看護 重い精神障害 教育プログラム 混合研究法 リカバリー

### 1. 研究の背景と目的

我が国の精神保健医療福祉は、入院中心から地域生活を支援する体制へと移行してきており、精神科訪問看護が担う役割は大きい。精神科訪問看護は、入院期間の減少や再発予防効果等の効果が明らかにされている一方、重い精神障害をもつ人に対する効果はみられないという報告もあり、課題があることが示唆されている。また、精神科訪問看護を実施している看護師は、重い精神障害をもつ人に対して様々な困難や課題を抱えており、看護師に対する教育の必要性が言及されている。これまで精神科訪問看護を実施する看護師を対象に行われてきた教育プログラムは、主に精神科訪問看護の経験が浅い看護師を対象として、基礎的な知識や技術の習得を目指したものであり、重い精神障害をもつ人に対する支援に焦点をあてた教育プログラムは報告がない。そこで本研究の目的は、重い精神障害を持つ人を支援する精神科訪問看護のための教育プログラムを作成し、評価することとした。

### 2. 方法

#### 1) 教育プログラムの作成

方法論的枠組は、インストラクショナルデザインの基本プロセスである ADDIE モデル<sup>1)</sup>を用いた。先行研究<sup>2)</sup>及び文献レビューから、学習者のニーズを明らかにし、統合失調症をもち、症状対処が困難な状況にある人のリカバリーを支援するための、知識と技術を身に着けるといふ、教育プログラムの目的を導き出した。訪問看護の目的と対象理解、つながりと安心感を育む、利用者の力を生かした生活密着型支援、幻覚妄想の対処への支援の4つの単元と、単元目標、学習内容を導き出し、教材の作成を行った。

#### 2) 教育プログラムの評価

##### (1) 研究デザイン

混合研究法における、量的研究に質的研究を埋め込む介入デザインを用いた。量的研究は、一群事前事後テストデザインであり、リカバリーの知識や姿勢、支援態度を測定する日本語版 16 項目 Recovery Knowledge Inventory (RKI) 及び、ストレングス志向の支援態度評価尺度 (ストレングス自信度・実施度) を用いた。質的研究は修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた。

##### (2) 参加者の選定基準とサンプリング法

選定基準を1年以上の精神科訪問看護の経験があり、現在も精神科訪問看護を実施している看護師とし、便宜的標本抽出法を用いて、教育プログラム開催地周辺事業所に研究協力の募集をした。

##### (3) 教育プログラムの開催

2日間で計10時間の教育プログラムを、国際医療福祉大学成田及び東京赤坂キャンパスにて、2019年2月～3月に計4クール実施した。

##### (4) データ収集

参加者の基本属性は教育プログラム開始前、RKIは教育プログラム開始前、終了時、1か月後の3時点、ストレングス自信度・実施度は開始前、1か月後の2時点で実施した。面接調査は、教育プログラム1～2か月後に実施し、平均面接時間は45.9分 (SD9, 範囲30-66) であった。15名に実施した時点で理論的飽和化を判断しデータ収集を終了した。

##### (5) データ分析方法

RKIは反復測定一元配置分散分析、もしくはフリードマン検定を行った。ストレングス自信度・実施度は対応のあるt検定、もしくはウィルコクソンの符号順位検定を行った。質的研究は、参加者の面接調査から作成した逐語録をデータとし、概念、サブカテゴリー、カテゴリーを生成し、参加者の学習のプロセ

スを明らかにした。

### 3. 倫理的配慮

国際医療福祉大学倫理審査委員会の承認を得た（2018年11月2日 承認番号 18-10-114）

参加者に研究の方法、参加の任意性、プライバシーの保護等について説明し、書面にて同意を得た。

### 4. 教育プログラムの評価

参加者の概要は女性24名、男性4名の計28名、平均年齢49.1歳（SD9.7、範囲27-61）平均精神科訪問看護経験年数5.2年（SD3.5、範囲1-19）であった。所属施設は訪問看護ステーション9名、精神科病院9名、総合病院9名、精神科クリニック1名であり、勤務形態は常勤24名、非常勤4名であった。

量的研究の結果、RKI総得点は、実施前と比較して有意に上昇し（ $p=0.000$ ）効果量は0.49であった。ストレンクス自信度総得点は、実施前と比較して有意に上昇し（ $p=0.000$ ）効果量は0.76であった。ストレンクス実施度総得点は、実施前と比較して有意に上昇し（ $p=0.002$ ）効果量は0.57であった。

質的研究の結果、8つのカテゴリー（【 】）、9つのサブカテゴリー（〔 〕）、33の概念（〈 〉）が生成された。教育プログラムの参加者は、〈これまでの実践に対する問題意識〉と、〈これまでの実践の意味付け〉というふたつの視点で自身の実践を顧みていた（【実践を顧みる】）。教育プログラムでの学びによって、参加者は〔実践のイメージが湧く〕ことに加え、〔実践に対するゆとり〕が生まれており、それが【実践への弾み】となり、【学んだ知識と技術の活用】につながっていた。参加者の実践は、【基礎となる支援の継続】をしつつ、ふたつの側面において変化がみられた。ひとつは〔視点の変化〕と〔リカバリーを目指す〕という【リカバリーを見据えた支援】への変化であり、もうひとつは、〔外在化の活用〕によって参加者と利用者が〈困難や課題を一緒に検討する〉ことや、〔利用者の思いが見えてくる〕といった、【協同作業の活性化】という変化であった。一方で、〈学んだ技術を使いこなせない〉場合もあった。【リカバリーを見据えた支援】と【協同作業の活性化】が往還的に実践されることにより、【利用者の力の発揮】が生じていた。

量的・質的研究を統合した結果、教育プログラムでこれまでの実践を顧みることと、実践への弾みを得ることにより、リカバリーを見据えた協同的支援方法を習得し、それがリカバリーの知識や実践を測る2つの尺度の得点上昇につながっていた。

### 5. 考察

リカバリーを見据えた協同的支援方法を習得するプロセスが、RKI総得点、ストレンクス自信度・実施度総得点の上昇につながっており、教育プログラムの学習により、リカバリーの知識や姿勢、リカバリー志向の支援技術が向上することが示唆された。訪問看護の目的と対象理解の單元では、従来の精神科訪問看護で目的としてきた、主体性の尊重や意思、希望の実現はリカバリーの概念と共通することを示し、精神科訪問看護の目的とリカバリーの概念を関連付けた。その上で教育プログラムの目標としてリカバリーを位置付けたことが、参加者の【リカバリーを見据えた支援】につながったと示唆された。幻覚妄想の対処への支援の單元では、支援の基本として協同関係を説明し、その具体的な支援方法として外在化を示した。この学習により利用者や看護師が問題を共に眺めて検討するという【協同作業の活性化】がおき、知識の習得にとどまらず、実践への活用につながったと示唆された。習得した技術の活用には高い実践能力が必要であり、技術の定着と向上のために、事例検討等の実践事例を用いた継続的な学習、教育プログラム実施後のフォローアップの必要性が示唆された。

### 6. 結語

重い精神障害をもつ人を支援する、精神科訪問看護のための教育プログラムを作成、評価した。混合研究法による評価において、量的分析では、日本語版16項目RKIとストレンクス志向の支援態度評価尺度の得点が有意に上昇し、質的分析では、リカバリーを見据えた協同的支援方法を習得するプロセスが明らかになり、教育プログラムにより参加者のリカバリーの知識や姿勢、リカバリー志向の支援技術が向上することが示唆された。

（引用文献）

1) Gagnè, R. M., Wager, W. W., Golas, K. C., Keller, J. M. 鈴木克明, 岩崎信 (監訳). インストラクショナルデザインの原理. 北大路書房, 2007.

2) 天野敏江. 重い精神障害をもつ人に対する精神科訪問看護支援の要素. 千葉看護学会誌, 24(2), 11-19, 2019.